

長が話をしてくれた。「村上少尉殿は浙贛作戰では特に連隊長殿の指示により殊勲の申請をしました」との由。面はゆい気持であった。

そのうちに五十三期の中隊長は、熊本の学校の教官（区隊長）として数々の武勲を称えられて内地へ帰り、後任として五十四期のおとなしい方が着任して来た。私はその後一年志願の古い将校（中尉で中隊長、大隊副官等）および古年次兵等の内地満期に繰り入れられて（右脚のピッコのため）、浦口（南京の対岸）―山海関―奉天―釜山と夏の貨車輸送で全員禪一枚、一週間余りで高知着。満期除隊。二十年四月再び応召。終戦に至る。

最後に右脚の経過がよくて切断されず、両足そろって残っている幸せを噛みしめては、約半数近い戦死した同期の幹候将校の冥福を祈るや切なるものがあります。

## 徐州戦

兵庫県 川戸 庄治郎

私は大正五年三月二十三日生まれで昭和十二年一月十日現役兵として鳥取歩兵第四十連隊に入隊しました。

「麦と兵隊」歌の文句にある如く、徐州戦は行けども行けども麦また麦の大平原を鳥取第四十連隊第二大隊は太く長い帯となり、連日連夜の進撃を行った。重い背囊にそして銃、髭はポウポウ伸びほうだい、汗にまみれ、泥にまみれ、唯黙々と進んで行く。馬も征く、車も征く、黄塵はモウモウと舞い上がる。

徐州攻略前哨戦、鉢巻山の攻撃に続き、後堡部落と幾つもの要衝を突破した我北川中隊は、次は前堡部落の薄暮戦となっていた。

当時二十倍の敵軍であったと聞く。支那総統蔣介石の精銳は部落の全面に広がる麦の中に数知れぬタコツ

ポの壕を掘り、我軍の進撃に備えて満を持し、あたかも嵐の前の静けさであった。

我隊は攻撃開始と共に麦畑の中に展開した。それを知るや敵軍は早くも死に物狂いで撃ってきた。「ピシピシピシー」と至近弾が耳をかすめる。「ダダダダアーン、バリバリバリ、ドドドドーン」まるで百雷が一拳に落下したものの如く大激戦場に変化した。長い柄の薙刀で横殴りに刈り払うが如く麦の葉はパラパラパラと飛び散り、凄まじい敵軍の銃弾は間断は無い。

「担架兵前へ」「衛生兵前へ」。早くも死傷者が出たようだ。我々は麦を掻き分け掻き分け亀が這う如く、ジリリ、ジリリと突き進む。

今まで嘗て遭遇した事も無い大激戦に変貌した。敵はタコツボの中から這い出して、「ボカーン」と手榴弾を投げに來た。姿は見せてない。敵とおぼしき所に猛撃を加え必死の前進を続けて行く。

敵も必死だ、後から押されて退却出来ないような感じがする。

我が分隊の者達も次から次へと倒された。それでも残余の者は一歩一歩部落目指して肉迫した。辛うじて部落まであと僅か百メートル位までに接近した。部落と通じる一本の狭い道路と出くわした。道路は麦畑よりやや低くなっていた。そして傾斜した土手を作り其の上に麦畑が広がっていた。吉田千代治分隊長（出石郡出身）と私の二人はこの道を駆けていた。射撃姿勢で麦畑に向かってその土手に伏せた。二人は二メートルと離れてはいなかった。伏せた瞬間「ガチーン」と言う鋭い音がした。分隊長の方を見た、白紅の肉片が「バシッ」と我に降りかかり目前を飛散した。「アッ」と思ったが鉄兜は「ガボッ」と後へ飛び散った。銃弾は鉄兜の上から眉間に命中し、銃は堅く握ったそのままで「ガクッ」となって前に倒れ一声も無く即死だった。至近からの凄まじい銃弾でありどうする事も出来なかった、無念だ。

その時の状況を後で考えたことであるが、私が伏せた前面には麦が生えていた。分隊長が伏せた前面に麦は無く其の境目に敵はタコツボの壕を掘り我々の進出

を待つていた。そして伏せた其の瞬間を狙つたものである。もう数秒間、敵が撃つのが遅れていたら、こちらが敵を撃つていたのであろう。いくら考えて見ても残念であり、五十数年が過ぎた今も尚、あの時の面影がありありと思ひ浮かび、そして自然と涙が出て来るのである。

遺体の収容はまだ出来る状況ではなかった。きつと収容に来ますよと祈りを捧げ敵愾心はますます燃え、銃弾の飛び来る中を突き進む。

何時しか我が分隊も柏木と私の二人だけになっていった。分隊長が倒されたこの道を二人はさらに前進し、後堡部落まであと僅か五十メートルまで接近したころ、「ヤラレタッ」と言う声が出た。フト見れば柏木は右大腿部貫通で二箇所から血が盛んに吹き出していた。「アッ」と思つて急いで駆けより「シツカリシトレヨ」「大丈夫ジャド」と励まし、巻脚絆をほどきよる間にも、どんどん出血し、軍衣は一面朱に染まり、顔色は段々青ざめていく。巻脚絆で出血箇所をぐるぐる巻いた。出血を止めようとあせつた。

「衛生兵前へ」「担架兵前へ」声を限りに呼ぶのだがその声は届かない。弾がビュンビュン飛び散る中を必死になつて駆け巡り、救助を求めたが、何せ物凄い死傷兵統出のため、前線でやられた者にまでは中々手が届かず来てくれない、仕方ないから隣の分隊へ行つた。

「オイ一人来てくれ柏木が足をやられたので後へさげてやりたいんじゃが、一人になつてしまつたんでどうにもならんのじゃ」

「何言うとるんじゃ俺の分隊も二人だけになつてしまつとるんじゃ、行けるか。」

仕方が無いので柏木の所へ戻つてみた、

「淋しんじゃ。おつてくれ」

と言つて大きな涙をこぼしていた。敵の目前での負傷、しかも付近には誰もいない。

「何言うじゃしつかりしとれよ、もうすぐじゃ」

柏木を励まし時を待つ。やがて薄暮となり、漸く夕闇が迫るや激しかった銃弾も止み、敵は後方へと退いた。たどり着いた部落の端に独立家屋があった。周囲は

壁で入口は一個所扉が一枚付いていた。負傷兵十数名はその独立家屋に收容した。前の広場には戦死兵四十数名を收容した。その頃もう日はとっぷりと暮れていった。

「川戸上等兵は衛生兵と二名で負傷兵の警護につけ」と言い残した北川中隊長は残余の兵を引き連れ部落の先端へと出て行つた。部落までには百メートルはあつた。

壁にもたれ、銃を肩にウトウトしておつた真夜中の事である。「タッタタッタタア」敵は喇叭を吹いて夜襲にやつて来た。ガバツと飛び起き身構えた。我が本隊は遠く部落の前面に進んでいてもう連絡をとる事は不可能である。我々二人には大きな責任があつた。先ず負傷兵を守らねばならぬ。外の戦死兵を荒らされてもならぬ。緊張の時は過ぎるが、その後敵は静まりかえつて物音一つ立てては来ない。全く不気味である。

「見てくる」

と言つて衛生兵はそつと出た。

「いついこと、来とるがいや、囲んでしもうとるど」

その声聞いて痛みをこらえながらも「ウンウン」うなつていた負傷兵が銃を握り、ムクツと起き上がった。「何するんじゃ心配するな寝とれ。もし敵が入つて来たら手榴弾をブツつけるからな、心配せんでもええ。寝とれ」

無理矢理に負傷兵を寝かせた、負傷兵達は銃を握りしめて横になつた。

段々と時間は経過した、私は扉を細目に明けて、外の様子を窺いながら、まんじりともしなかつた。息を殺しマバタキひとつ出来ず必殺の信念で身がまえた。漸く空が白む頃、敵は包囲をとき洪水が引く如くに退却した。

「あ、やれやれ」大きな息を吸いこんだ。握りしめていた手榴弾には油汗がにじんでいた。北川中隊長は兵を集め点呼をとつた。一個中隊二百四名、これが残存兵力七十名に落ち込んだ。後堡部落の攻撃が如何に激戦であつたかを物語るものであつた。

戦死兵の火葬となり、先ず深さ一メートルの壕を横一線に掘る。家屋を崩してその中に太い木材をつめる。

その上には麦藁を集めて充分に敷く。死体は静かに一列に列べ、順番に名前を控え、さらに麦藁を被せ、小さな木材を載せて点火する。

昨日まであんなに元気に戦場を駆け巡り、喜びも悲しみも共にしてきた我が友と、これが永遠の最後のお別れと思った時、目には涙が浮かんでくる。古兵達は涙ながらに読経を始め、我々もつづいて黙禱、深い合掌を捧げた。

煙は高く高く天に昇っていく、この煙を見て敵は砲弾を撃ちこんで来た、「ヒュードカーン」。今までに体験したこともない大型砲弾であった。音のウナリも重い重圧感があった。土煙は空高くもうもうと舞い上がり、大きな弾痕が火葬の付近に発生した。この砲弾をドラム缶とも呼んだ、勝陽山から撃っているようであった。

「今度の砲弾は凄いいじゃないか」

「迫撃砲とは比べ物にならないがな」

「日本の野砲は一体どないしとるんじゃろう」

「日本の野砲ではまだ勝陽山までは届かんらしいぞ」

「何じゃいまいましいなあ」

「内地の要塞砲を送りこんでいるらしいぞ」

「早よう送ってこんと間に合わんがな」

勝陽山はまだ見えてはいなかった、だが然し勝陽山が堅陣である事だけは想像ができた。

「おい皆、靴下を持って集合せい」

「喉仏を拾え」

「喉仏は此処じゃ」

「喉仏を拾ったら付近の骨を八分目程靴下に入れい」

「入れ終ったら靴下に名前を書け」

古兵達の指図に従って中隊名と名前、そして年月日も書き、胸に下げていた認識票も入れて後方へと送った。やがて内地送還となり家族のもとに届くであろう。元氣に出征した兵隊の白木の小箱に入れられて変わり果てたこの姿を見た時に、家族の者達はどんな思いで迎えをするであろうか。

「御国の為によくぞ闘ってくれた」

と口では笑って心で泣いて、キューと強く抱き締める軍国の母。そしてまた軍国の妻。ああ可愛い子供達

の上に思いを馳せる時、目には熱い涙が浮かんでくる。

戦争とは悲惨である。尊い多くの人命を奪い、国土は破壊され、住民は巻き添えとなり、人生不幸の始まりともなつて行く。

戦争は絶対にしてはならない。させてはならぬと思いつつも、でも我々は聖戦と言う美名のもとに戦つた。

あ、また大勢やられたなあ。弱小部隊になりながらも自らを鼓舞し、重い背囊にそして銃、我が身の落命の順番を待ちながら隊列の中の一兵士となり、徐州戦最後の要衝、勝陽山目指して進んで行った。

## 体験記

― 去る大戦を省みて ―

兵庫県 中西 文次

私は、この大戦において、支那事変を通じて六カ年半有る余従軍し、また従属して参りまして、幸い九死に一生を得て生還した一人として、その経過を発表させ

て頂きます。

私は昭和十二年七月末ごろ、日支事変勃発と同時に召集され、姫路磯谷部隊前野部隊本部（師団輜重隊）に編成され、歓呼の声に送られて勇躍出征しました。わが部落からは六名の友達と同時に動員され、私の外五名は全部姫路歩兵三十九連隊（沼田部隊）で、日支事変中勇名を轟かした部隊でありました。

渡支後は泥寧深き河北省、中支、南京、漢口作戦、京漢線守備等、山岳戦も含めて二カ年半にわたり転戦して参りました。

磯谷部隊は元姫路第十師団で第一線攻撃部隊です。立ち向う所、彼我共に犠牲者は夥しく、多くの戦死傷者が出ました。現在の中国からいえば侵略掠奪行為かも知れませんが、皇軍の名のもとには絶対服命、完遂せねばいけなかったのです。それ故最前線戦闘部隊である歩兵また特科掩護隊、いづれも相手と交戦せざるを得ない任務です。したがって損耗率は高く、戦死戦傷かつ無理な体力の酷使から病に倒れた将兵が多かつたのです。